

香港稲門会

Overseas TOMONKAI

China



Hong Kong
Webサイト
http://www.tomonkai.org/

会員からのメッセージ

●海外の駐在は香港が3カ所目、そろそろ3年となります。駐在各地で稲門会には必ず顔を出してきましたが、「都の西北」を歌う回数ではここ香港が突出しています。早慶ゴルフほか各種イベントでの熱狂的な盛り上がり、稲門の繋がりを商売にもしっかり活かす会員各位の貪欲さ、国際交流に名を借りた合コン開催など、混沌としてエネルギー溢るここ香港ならではの、「楽しく、ためになる稲門会(トリプルT)」、存分に満喫しております。
鈴木康太郎(1984年政経)



早慶ゴルフ

●2010年より香港で暮らしております。「稲門会」——日本にいる時は無縁でしたが、香港に来て初めて「海外の稲門会」を知ることとなり、「早慶ゴルフコンペ」から私と香港稲門会のお付き合いが始まりました。ここではさまざまな業界の先輩・後輩と出会い、日本ではできなかった貴重な経験をしております。いつまでも熱いワセダ魂をこの熱い香港で育んでいく所存です。これからも多くの早稲田の方々とお会いできるのを楽しみにしています。
田中里和(2002年商学)

●金鐘にある金融タワー群、今のパシフィックプレイスのある所は昔の移民局だ。大陸から避難してきた難民らが移民局の前で入国審査を待っていたという話を、30年以上香港に住んでいる先輩から、ある稲門会のイベントで聞いた時はとても印象的だった。香港を愛する先輩から、僕が生まれる前の香港の話聞き、時空交差という感じがあった。もし稲門会がなければ、このような角度から見る香港の歴史を教えてもらう機会は、きっとなかったと思う。
紀 徳禮アンドリュウ(2011年政研修)



姫路早稲田倶楽部交流会

香港稲門会の人びと

People

●1957(昭和32)年4月、大隈重信の銅像のそばに1台の白いダットサンが置かれていた。立て看板に「此の程、インドから象が日本に寄贈された。インド国民の温かい友情に、われわれ早稲田大学の学生はこの自動車を感謝の気持ちとして訪日中のネール首相に贈るものである」と書かれていた。新入生の自分は「いい学校に入ったものだ」と感動したものである。あれから50年、一昨年のホームカミングデーに出席し、また同じ感慨に胸を熱くした。「いい学校を出てよかった」と。留年を重ねた自分は卒業年度もかなり遅れていたが、卒後50年の式典には同級生と一緒に喜びを分かち合うことができるよう、案内状が送られてきたからだ。

異郷の地・香港で校歌を斉唱する時、我らが早稲田がいい大学であることを改めて心から思うものである。
岩見武夫(1964年商学)

●親子二代で文学部卒、両親は早稲田の研究施設で知り合い結婚しました。私自身は香港に嫁ぎ、在住14年。長い海外生活は楽しいことばかりではなかったのですが、支えや目標になってくれたのが稲門会の方々です。とくに日本人移住の歴史が長い香港では、30年、40年と現地に融け込み活躍なさっている先輩方が多数おられ、本当に励まされてきました。父は古希を迎える現在も同窓生たちと同人誌を作成し、「学友は生涯の宝」と言います。娘の私は、ここ香港でそれを実感しています。
橋本典子(1994年文学)



総会

香港稲門会について

About

香港稲門会の歴史は古く、第二次世界大戦前に遡るようです。登録稲門会としての発足は1980年で、現在は約200名の会員が在籍しています。年次総会、クリスマス会、ゴルフコンペにおける会員同士の交流はもちろん、新年餅つき会(東京六大学・香港大学・香港中文大学合同)、留学生との国際交流会を通して積極的に日本文化・情報の発信を行っています。

永遠のライバル三田会との



若手会

関係は世界共通。毎年の早慶合同パーティーでは、「レガッタ」と称する8人1組のビール早飲み競争で優勝カップを奪い合う、熱い戦いを繰り広げています(今年は雪辱戦!)。このほか、平成卒業生による若手会(「レガッタ」選手養成所?)、早慶女子会など、会員の自発的な会合も活動中。帰国者による香港稲門会東京支部も2000年に発足し、交流を続けています。
門脇希久子(1990年文学)

香港の魅力

Charm

香港は1997年に英国から中国に主権が移譲されたあとも、2047年までは資本主義システムが維持される一国二制度を採用。また日本からの便利なアクセス、中国本土への玄関として、ますますその魅力の幅を広げています。

人口は約710万人。面積は約1100km²で東京都の約半分の小さな都市に、美しい夜景、海鮮、飲茶、世界各国の料理、世界のブランドが集まるショッピング天国、ディズニーランド、足裏



香港百万\$の夜景

マッサージ、さらには ترام、2階建てバスといった香港ならではの乗り物など、観光都市としてのエッセンスが凝縮されています。在留邦人は約2万人。会員数約200名の香港稲門会もまた、この都市の要素の一つです。

ビジネス面では行政の規制が少なく、整備された法制度、自由な為替管理制度、簡素かつ魅力的な税制(法人税16.5%、所得税は15%、消費税、利子・配当所得税なし)により、世界各国の有力企業が拠点として活用。人材の集まる大変エネルギー溢る街です。スイスのある調査では、堂々の国際競争力世界第1位。皆さまも是非、ビジネス、プライベートでいらしてみませんか。
山本 巖(1990年理工)

会長メッセージ

人種のルツボ、エネルギー溢る街。中国に返還されたあとも、香港はまだその色を失ってはいません。香港稲門会も、最高齢93歳の名誉会長から卒業したての若手まで、この街と同じく、さまざまな個性と活力をもった皆さんが集まっています。若手と女性陣の元気さは特筆もので、今どきの若者像とは違う、自立心と積極性をもった若い校友が活躍する姿は、大変心強い一方で、青雲の志に若干鬱りの見えるわれわれベテラン組も、早慶ゴ

ルフに活躍の場を求めて、若き日と変わらぬ一途さで、勝利に一喜一憂しています。

国際交流も、香港稲門会の特色的な活動の一つになっています。日本に留学する香港の大学生との交流や支援を行っており、後々は香港稲門会の中心的なメンバーとして戻ってきてくれることを期待しています。全く違った時代を過ごしてきた面々とここ香港で出会い、一つの校歌を一緒に歌える喜びを感じつつ、稲門会活動を繋いでいます。
安藤亮次(1982年政経)